

幼児の体育遊び

——オリンピック遊びより——

福 西 百 合

「先生オリンピックだよ！」と長い棒に日の丸をつけて登園した子があった。オリンピックが終っても、まだ何らかの形でオリンピックというものが子どもたちの遊びの中にでることがたびたびある。五才児のクラスにおいて、オリンピック期間頃から、オリンピックというものが遊びの中にどのようにあらわれてきたかふり返ってみたい。オリンピックというものは、はじめコマージュルの中で子どもに触れたことばのように思う。子ども自身がそれが何であるかと知る前に、そのことばを使いはじめた傾向があった。

オリンピックに対する莫然とした興味は、かなり前からあったが、それが形として表われたのは、やはり聖火が日本に着いた頃からであった。

「万国旗書き」

新聞、雑誌にでているオリンピック参加国の旗に注目したのは数人の男子であった。「ボク旗をかくんだから紙ちょうだい」と二三人が始めた。旗の大きさは、百か国近い参加国を掲示するにはあま

り大きくできないし、水彩では色が混ざり不鮮明になると思い、わら半紙四分の一の大きさの紙に、クレパスと色鉛筆を使ってかくことにした。いつも思うままに絵をかくている子どもたちであるので、はたしてどのような新興国の旗ができるものやらと思っていたが、子どもたちのしていることは、本にかかっているものと同じようにかくことであった。「旗はその国のマークだから少しでもちがうと他の国のものになるんだよ。だからおんなじにかかなくちゃだめだよ」といつつ旗作りは常時二十人近い子どもたちで数日続けられた。旗の裏面には、国名とかいた子の名前を記した。したがって、チャドとかマリとか日頃耳なれない国名までも口にするようになった。それらの旗は、一か国一枚は壁に掲示し、他は棒をつけて粘土で作った台にさした。合わせて三百枚程の旗ができた。

「オリンピック参加国を知ろう」

各国について少しでもよく知るために、さまざまの写真を旗と一緒に掲示したり、人形、民芸品などでもできるだけ展示した。イギリ

スの围の人のごあいさつだといつては、ハウアーユートと握手をしあう子がでたり、外国に対する興味がでてきた。

「聖火リレー」

毎日のようにテレビにでてくる聖火リレーをみて、それをまねする子がでてきた。はじめは、バトンやバドミントンなどの手近にあるものを聖火として走っていたが、次第に紙で筒状にしたものに他の紙を入れ、火のように色を染めたものができ、それを持って室内や園庭を走りまわる子が多くなった。その頃近くを聖火が通過し、それを見た子の助言により、より具体的に表現されるようになった。聖火リレーに熱が入ったのは、国立競技場に聖火がともされてからだだった。開会式の緊張した雰囲気の中を走った最終ランナーの坂井君は印象的だったらしく「ボク坂井君だよ！」という子が続出し、箱積木で作った聖火台が子どもでいっぱいになった。どうしたら燃えている聖火らしいものを作れるかを考えていた子は、洗面器のまわりに色をつけ、中に色紙やいろいろのものを詰めこんで聖火を作り、聖火台の上に置いた。それにより聖火リレーがより多く、くり返されるようになった。しかし積木の聖火台は時々はままごとのお店になったりしたこともあった。またおもしろがって他のクラスから聖火をきわりにきた子もいた。

「競技場作り」

「先生！坂井君ができたよ！」と粘土で作って持ってきた子があった。それに続き、聖火台や表彰台ができた。そこで大きな紙をだ

して「競技場をつくりましょうよ」ときそいかけた。雑誌や絵本にある競技場の絵を見たり、テレビで見たものの記憶などで三人位が一グループになり国立競技場を作りはじめた。「ボクもかくんだ」という子が集まり、駒沢オリンピック公園はじめ、いくつかの競技場が作られた。戸田漕艇場では、粘土で作られた選手、ボートが競技をした。また重量挙げの会場の細かい描写からは、いかに注意深くテレビを見ていたかがわかるようであった。しかしさすがに競技場の観客をかいていた子は、その数の多さに悲鳴をあげ、「先生！日曜日には見ている人いないよね！」とか「夜はいないよ！」と競技のない日の競技場にして、一時中断した子もあった。

「重量挙げ」

比較的早くから行なわれた種目であったので興味が多く集まった。「重量挙げみたよ！」と朝、話をしつつ登園してきた子たちと相談して竹棒に円形のダルボール紙をはめこみバーベルを作った。子どもたちの観客につつまれ、軽いものではあるが、重そうに真っ赤な顔をして、それを持ち上げている子たちの姿にはほほえまざるをえなかった。「いつまでも持ち上げないの誰だっけ？」「持つ前に手に粉をつけるんだよ」「くつもだよ」などとお互いに忠告を与えつつ交代に持ち上げては、「ランプが三つついたよ！」と審判になる子まであらわれた。

「入場券」

「入場券を作ろうよ！」と一人の子が言い出し、五輪マーク入り

の入場券作りがはじまった。作るのを待ってる子どもたちはすぐに買いあげてしまった。牛乳のフタのお金を持ってそれを買いに集まる子たちと、それに値段をつける子を見てみると、入場券を手に入れるために生じたさまざまなことが思いだされた。入場券を手に入れた子は、ハンドバッグをさげたり、おもちゃのお菓子、果物をバッグに入れて見物に集まってきた。競技種目は、前にのべた重量挙げの他いくつかあった。

「走り中とび」

これは男子がとくに喜んで行なった。自分の国は××であると、その国旗を持って並ぶ。審判はその旗でとんだ距離を示した。踏み切り板からでてとんだりしたら、反則として距離をはからないなどは、テレビをみて知ったらしい。約十人の一グループが終ると、順位を審判が発表し、表彰式が行なわれた。

「高とび」

高とびは運動会に用いた玉入れカゴの支柱にゴムをしぼり、ゴムとびのようにして行なわれた。はじめは低いものから始めたが、次第に高くなると、三度位挑戦して結果をだすようにした。高とびは中とびに比較すると、とべたか否かが明確にわかってよい反面、とべなかった子にとってはおもしろくないという気持ちをいだかせたらしい。

「表彰式」

はじめは積木を並べただけのもので、一位、二位、三位とそれに

乗るだけであったが、次第にメダル作りが行なわれ、色のついたテープに金、銀、銅とそれぞれ色のちがう紙をはり、お盆にのせられた。表彰式になると女兒がそのお盆をはずしずつ持って表彰台の前に行き、メダルをかけてあげる役の子にさしだす。メダルをかけてあげた子は選手と握手をしたり本物そのままを再現しているようであった。三人がメダルをさげ終ると旗の係りの子がいて、「国旗ケイヨウ！」とヒモをひいて旗を上げる。「オリンピックの歌だよ！」と君が代とアメリカ国歌をうたう子もあった。そこまで行なうと、子どもたちは再び競技にもどり、同じようなことがくりかえされた。以上のように、旗作りから各種の競技の遊び、その見物など、したいと思っていた遊びはほとんど子どもたちからでておもしろく展開した。

オリンピックというものが、子どもにとっては何であったのだろうかと時々考えることがある。聖火が運ばれ、外国選手応援団が来日し、運動競技がくりひろげられた。それを通して子どもたちは世界の国々というものに目を開き、同時に日本という自分の国をも意識するようになった。国旗というものを教えられずとも国旗に興味を示し、君が代が日本の国の歌であることもわかり、メロディーを口ずさむようになった。

このように子どもの中に芽生えたものをどのように成長させるかが、オリンピックの終った各保育室に残された課題であった。